

The Jonsonian Masque in the Reign of James I

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兵頭, 晴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6092

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ジェイムズ朝における王室と ベン・ジョンソンの仮面劇との関係

兵 頭 晴 子

本稿ではベン・ジョンソン (Ben Jonson 1572-1637) の書いたいくつかの仮面劇を取り上げて、それが当時の王室にどのように関わっていたかを確認する。また、多くの仮面劇は民間の祝祭の時期と一致するクリスマスシーズンに行われたが、民間の祝祭にどのような変化を加える形で人工的祝祭ともいえる仮面劇が成立しているのかも考える。

1 ジェイムズ朝における宮廷仮面劇

イギリスにおけるジェイムズ王の治世 (在位 1603-1625) 2年目から、宮廷仮面劇はほぼ定期的にベン・ジョンソンに依頼された。彼はせりふと構成を、イタリアから絵画や建築の最先端の知識を持ち帰ったイニゴー・ジョーンズ (Inigo Jones 1573-1652) は舞台装置、照明、衣装を担当した。この二人によりイギリスの仮面劇は特異な発展を遂げた。

14世紀ごろからエリザベス女王の時代までは‘court masque’と呼ばれるものは主としてダンスや歌が中心の「仮装舞踏会」であり、そのほかにショーや武術の試合なども含まれていた。

ベン・ジョンソンとイニゴー・ジョーンズが提携して‘court masque’を作成するようになってから‘court masque’は大きく変化してゆく。王室から‘masque’の作成の依頼を受けたジョンソンは、ダンスや歌の前後に挿話を付け加えるなどして、劇仕立てとしたので、‘masque’は「仮装舞踏会」ではなく「仮面劇」と訳すほうがその内容をよりよく示すことになる。ジョンソンの仮面劇には年を追うごとにドラマティックな要素が付け加えられていった。

イニゴー・ジョーンズは、イギリスでは初めて遠近法を用いた書き割りを作り、回転する作り物や、様々な巨大な機械仕掛けの装置などを作った。この中から突然登場人物が現れたり、その中へ急に姿を消したりたりすること

で観客をわかせた。また、目くるめく照明、ファンタスティックな衣装、ヘアスタイルなどで、衝撃的な驚きと喜びを観客に与えた。当時の一般の舞台では、舞台背景、舞台装置は使われていなかった。日本の能舞台のように舞台上にはほとんど何もなかったのである。現代劇に見られる舞台装置はイニゴー・ジョーンズが仮面劇において初めて用いたのである。イニゴー・ジョーンズの舞台装置は、その仮面劇の行われる目的や、メインテーマを象徴的に観客に伝える役割をも果たしていた。

ヘンリー八世の時代（在位 1509-47）は、豪華な祝典を催し人々を楽しませるのは王侯の義務であった。しかし 1603 年、ジェイムズ一世が王位についたころ、イギリスでは商業に従事する者の中で清教徒（ピューリタン）と呼ばれる人々が影響力を増していた。16 世紀後半、イギリス国教会の宗教改革をさらに徹底させようとした一派で、カルバン主義の流れをくみ、純粋な聖書信仰に基づく社会の実現をめざしていた。彼らは節約、勤勉、潔癖なところがあつた。仮面劇などの宮廷での祝祭や催し物には莫大な金銭が使われた。一晚の催しのために数千万円から 1 億円近くを費やしたのである。宮廷全体が浮かれ騒ぎ、風紀やマナーが乱れることもあつた。これはエリザベス女王の時代にはなかつたことである。エリザベス女王を支えてきたロバート・セシル（Robert Cecil）は、エリザベス時代の政策を引き継ぐ形でジェイムズ王を支えた。しかし 10 年後に彼が亡くなると、ジェイムズ王は寵臣たちに多くを委ねるようになる。その結果、あらゆる面で混乱が生じ始める。特に経済的にはかなり不安定な状況に陥つた。このようなとき、仮面劇は浪費と考えられ、ピューリタンの批判的となった。¹ 1625 年、フランス・ベイコン（Francis Bacon）も「仮面劇など取るに足らぬなぐさみである。しかし、王や貴族たちはそれを切望しているので出費をほどほどに抑えてエレガントな内容のものをつくるようにしたらよかろう」といつている。² それは次第に大きな圧力となり、仮面劇にも影響を与えてゆく。1642 年に、ピューリタンのクロムウエルが政権を取って共和党政行がられるようになると劇場は閉鎖され、宮廷仮面劇は無論行われなくなった。王政復古となつて、劇場が再開されたあとも宮廷仮面劇が復活することはなかつた。

儉約を心掛け、国庫からの出費をできるだけ抑えて賢く振舞つたエリザベス女王と異なり、王位につくとすぐに浪費を始めたジェイムズ王のもとで国庫はたちまち財政危機に陥つた。デンマークの王女であつたアン王妃も国庫

の財政には無頓着であった。1604年から1609年の間に王妃はベン・ジョンソンに3つの仮面劇の作成を依頼し、それらすべてにおいて王妃自身が仮面劇の主演を演じた。仮面劇には王族や貴族とその夫人たちが仮面劇の演者(マスカー)として、豪華な衣装を着てダンスを見せる。仮面劇の中には *revel* とト書きに書かれているところがあるが、これは観客である王侯貴族1000人あまりと、仮面劇に出演している貴族たちが混ざり合っただけの大ホールで舞踏会をするのである。これが一般の劇とまったく異なる点である。舞台からホールへ降りてきた、仮面劇の登場人物たちとともに観客が踊ることにより、彼ら自身も仮面劇の世界の中に取りこまれる。セリフや歌はプロの俳優や歌手が担当するが、彼らは身分が違うので貴族たちとともに踊ることはない。こうした大舞踏会も仮面劇というストーリーの中の必然的な展開として構成されている。仮面劇の中のセリフや歌はやや多いものもあるが、一般的にはすべて合わせて300行前後のものが多い。当時の劇には約3000行ほどのセリフがあったことを考えると仮面劇では、ことばの部分がいかに少ないかがわかる。つまりダンスの時間が長かったのである。*revel* ではいくつもの種類のダンスを皆が踊った。ダンスは1時間も続くこともあったという。こうしたダンスや飲食の時間も含めると、仮面劇は少なくとも3時間、場合によっては夕方から翌日の夜明けまで続いた。たとえば主賓であったジェイムズ王が「もっと踊れ」といえば仮面劇のストーリーとは関係なくダンスの得意な貴族たちが次々に華麗な技を披露して見せし、同じく疲れてきた王がそろそろ終わりにするようにと指示すると、仮面劇は終わりの形へと進められてゆくのである。

以下にいくつかの作品をとりあげ、王室との関わりを考える。宮廷仮面劇はほとんどが宮廷内のホワイトホールで行われた。ホール、その他の仮面劇に関する図や写真もいくつか提示する。



1 ホワイトホール

2 『黒の仮面劇』 (*The Masque of Blackness*, 1605), および 『美の仮面劇』 (*The Masque of Beauty*, 1608)

『黒の仮面劇』には「エチオピアから来た娘たちが、美しい白い顔になるためにイギリスにやってきた、海で水浴したのち、太陽で乾かせば白く、美しくなれると月の女神に告げられる」というストーリーが添えられている。王妃をはじめ、ベッドフォード公爵夫人 (Duchess of Bedford)、ダービー公爵夫人 (Duchess of Derby) など最も高い位の廷臣の夫人たちが出演していた。彼女たちは仮面をつけてはいなかったが、手先から肘まで、および顔全体を黒く塗っていたので、仮面をつけたのと変わらないほどの変身をしており、観客には誰が誰だかわからないほどであった。舞台装置としては貝殻の形の作り物の中からマスクが出てきたり、波が観客のほうへ打ち寄せるように見える海の作り物があつたりと、今まで舞台装置のまったくない形で劇を見てきた観客にとって衝撃的な印象深いものであった。高貴な夫人が顔を真っ黒に塗ることについては眉をひそめるイギリス人も多かった。おそらくイギリス人よりは芸術感覚も優れていると思われるイタリアやスペインなどの大使たちは仮面劇全体をより深く理解し、楽しんでいたようであった。王妃は活発な性格で、主役級の出演者 (main masquer) として両作品に出演し、その存在感を宮廷全体に印象づけようとしたらしい。今まで見たことのないドラマティックな構成と舞台上に観客は注目していたためかこの目的はあまり成功しなかったようだ。

『美の仮面劇』は十二夜の仮面劇として王妃がジョンソンに作成を依頼した。王妃は次のような条件をつけた。前回同様、今回もエチオピアの娘たちをマスクの役とすること、『黒の仮面劇』で月の女神が娘たちに約束した通り、彼女たちの肌は白くなって登場すること、前作品との間の3年という年月を納得のゆく形で筋の中へ織り込むこと、『黒の仮面劇』を前編として『美の仮面劇』を後編とする仮面劇を作ること、マスクをさらに4人増やすことである。

エチオピアの娘たちは海に漂う島に乗ってイギリスに向かっている。人口の海の上を島の装置が漂いつつ観客席に近づいて、ついにイギリスの浜辺に着く。島にはマスクの座る玉座があり、周りにキューピッドや楽人たちがいる。木陰や亭もある。トレミーの説による、星の張り付いた天体は東から西に回るが、玉座はそれと同じ回転運動をしている。玉座に至る階段は、惑

星の動きと同じ、すなわち西から東へ回っている。当時の天体に科する知識を取り入れた装置である。王妃がここでも自身の存在感を示そうとした仮面劇であったが、『黒の仮面劇』の場合と同様に観客は王妃よりも、壮大な舞台装置とジョンソンの新しいスタイルの仮面劇にまず心を奪われたことだろう。

宮廷内に登場し、もてなしを受けてから送り出されるマスクーは、民間の祭りにおける神に相当する役を演じている。もてなしをする役は海の神オーシャヌス (Oceanus)、エチオピアの娘たちの父親ナイジャ (Niger)、月の女神など本来の神々が演じている。ニンフの役を与えられているとはいえ、アイデンティティのはっきりしている宮廷の人々、つまり人間に神が仕えている。民間の祭りと比較すると人間と神の関係は逆転している。

この仮面劇においても、他の仮面劇においても「月」や「月の女神」が何回か登場するが、当時の人にとって月は処女神、狩猟の神であり、それはすぐに処女王エリザベスと結びつくイメージであったようだ。ジェイムズ王の治世には不安が多い中、安定したエリザベス女王の時代を懐かしむ思いがこのような形で示されているとも考えられる。³

3 『婚姻の神、ハイメンの仮面劇』 (Hymenaei, 1606)

1606年、1月5日と6日の2日にわたって盛大に演じられた。普段はクリスマスシーズンの最後を飾る仮面劇が演じられる時期であるが、この仮面劇はまだ10代の花嫁と花婿の結婚を祝うものであった。これはライヴァルとして対立していた2つの大貴族たちの息子、エセックス伯ロバート (Robert Devereux, 3rd Earl of Essex) とサフォーク伯の娘フランシス・ハワード (Lady Frances Howard, daughter of the Earl of Suffolk) を結婚させることにより、両家の仲直りを図り、宮廷内の力関係の調整をしようとするジェイムズ王がまとめた、いわゆる政略結婚であった。この仮面劇はジェイムズ王の依頼で作成された。

1日目は仮面劇が行われ、2日目は試合 (Barriers) が行われるという盛大なものだった。ジョンソンがセリフや歌を作り、ジョーンズが、いまだかつてなかったような豪華な舞台装置を作った。多くの宮廷仮面劇同様、ホワイトホールで催された。1日目の仮面劇ではジュノー (Juno) の神殿が舞台上にある。また、結婚式のとり行われる祭壇が見える。新郎新婦の役を演

じる者や、ハイメンや供の者たちが登場する。結婚式という場面設定である。舞台上の地球の形をした装置から「感情」(Affection)と「気まぐれ」(Humour)(4人ずつの男性マスク)が飛び出す。彼らは結婚式を妨害するものである。しかし「理性」(Reason)の力により彼らは簡単に制される。

世界中の国々で冬から春への移り変わりを示す日、つまり冬至のころに、太陽の出る時間が長くなってゆくことを祝う祭りが行われる。西欧のクリスマス、日本の正月などがその例である。このとき、冬を示す人物(または人形)は春を示す人物に追い出されたり、殺されたりするという儀式が行われることが多いが、人工的祝祭であるこの仮面劇では、「理性」が「感情」や「気まぐれ」に勝つという形をとっている。「理性」は、地球の形をした装置の頂の部分にいて、人間の頭脳に相当する人物であることを示している。「理性」はマスクたちにペアを組ませることにより「感情」や「気まぐれ」との調和、調整を図り、完璧を示す円の形をマスクがつくって並ぶように指示を与える。「理性」が手に持つランプは、祭りにおける火と同様に悪を追い払うものであると同時に、知性の光をも表しているであろう。

舞台上では剣を用いて結婚式を妨害しようとする「感情」や「気まぐれ」を「理性」が叱責する。妨害されて散りぢりになった人物たちは、ハイメン(Hymen)が元の位置に並ばせて儀式をとり行おうとする。次に舞台の上側の、天に相当する部分が開いて、上からジュノー、ジュピター(Jupiter)、8人の女性マスク、アイリス(Iris)が登場する中、大気の精の音楽が聞こえてくる。この様子を見聞きして、観客は目を見張り、音楽に耳を傾けていただろう。「理性」は男性マスクと女性マスクにペアを組ませるようにと「秩序」(Order)に命じる。やがてマスクたちは輪を作り、その円の中心に「理性」が入って締めくくりの言葉を述べる。

「感情」や「気まぐれ」は争いあう両家の大貴族たちの象徴であろう。それを仲直りさせて見事な調和に至らせる「理性」はジェイムズ王を表している。性格はさておき、もともと学問好きで頭のよいジェイムズ王は「理性」に例えられることを大いに喜んだに違いない。「理性」(reason)という語はルネッサンス期には特別な意味を持っていた。それは動物にも植物にもないものであり、人間だけが神から与えられた「神の存在を知ることでできる能力」であって現在使われているような知的な判断力のみを指すものではなかった。「王権神授説」を唱え、それを信じていたジェイムズにとって、自

分が reason にたとえられ、神がもたらすような調和の世界をこの世にもたらす存在として描かれることは、この上なく満足なことであつたろう。「メシア（救世主）としての王」はルネッサンス的表現方法であつた。両家の結婚を祝す仮面劇は国王への素晴らしい賛辞ともなつていたのである。このように、賛辞の中に王や宮廷人として望ましい姿を呈示することは、ベン・ジョンソンの仮面劇の特質の一つである。

2 日目に行われた試合には歌も、ダンスもなく、行進曲と戦闘のラッパが鳴り響き、32 人の騎士たちの間で試合が繰り広げられる、観客は息をつめて見入つたことだろう。「乙女のままでいるほうがよい」と主張する「個人的見解」(Opinion) と「結婚したほうがよい」という「真理」(Truth) が論争を始める。その論争の決着をつけるために騎士たちが戦うのである。民間の祭りにおいて「冬」と「夏」が口論して、冬が言い負かされるという形がある。また当時中世の騎士たちの試合を真似ることが人々に愛好されたので、祭りにおいても「冬」と「夏」の争いを騎士の試合の形で演じることがあつたという。この仮面劇では「真理」と「個人的見解」という抽象的な大義のために試合が行われる。理由は何であれ猛烈な戦いであればそれだけで観客は十分満足したことだろう。試合の決着がつかないうちに天使が現れて戦士たちを和解させ、「個人的見解」を追い払う。結果的に「真理」は「個人的見解」に勝利したことになる。「結婚したほうがよい」という「真理」の主張が「乙女のままでいるほうがよい」という「個人的見解」の主張に勝つことは、祝婚にふさわしい結論であると同時に、「処女女王」として君臨したエリザベス女王の時代は終わり、結婚しているジェイムズ王の時代となつた、つまりこの試合では「処女女王」に、「結婚しているジェイムズ王」が勝つたということになる。⁴ さらにジェイムズにあまり気に入られていなかったエセックス伯ロバートのメンバーは負けた「個人的見解」の配役を与えられていた。

このように華やかに、盛大な祝婚の催しが行われたにも関わらず、2 人はともに暮らすことはほとんどなく、この結婚は、皮肉にも後に、殺人、騙し、スキャンダラスな離婚劇へと発展する。そしてジェイムズ王の寵臣であつたロバート・カー (Robert Carr) と花嫁は再婚する。

4 『妖精の王子, オベロン』 (*Oberon, the Fairy Prince, 1611*)

ジェイムズ王の子供の中、無事成長したのは長男のヘンリー王子、二男のチャールズ王子と女王エリザベスである。ヘンリー王子は学問にも芸術にも熱心で優れていたと同時に、武道においても力をつけていた。未来の王として申し分なく、国民の期待を一身に集めていた。ジェイムズ王は歴代の英国王の中でも最も出版された著作物が多い、学問好きな王であった。しかしその性格や振舞いについては、エリザベス女王と異なりたいへん不人気であった。国王として、どう振舞うべきかという感覚が欠けており、政治、経済についても国民に不安を抱かせることが多かった。国王は両性愛 (bisexual) であり 10 代の初めごろからすでに同性愛の傾向を示していた。彼の寵臣となるロバート・カー (Robert Carr) やバッキンガム公爵 (Duke of Buckingham) に対しては、外国の大使が居並ぶような場所においても、その愛情をはばかりことなく身をもって示していた。同時に一般の人々と交わることを嫌い、避けていたようだ。軽率な行為が目立つアン王妃、父王にまさるとも劣らない無軌道、わがままぶりを発揮したチャールズ王子など国民から敬愛されるには程遠いロイヤル・ファミリーであったが、その中で頭の回転が速く、理解力に優れ、分別のある行動をとり、愛国精神に富んでいたヘンリー王子は、国民に絶大な人気があった。国民はヘンリーが王になればまた素晴らしい英国に戻れると大きな期待を持っていた。

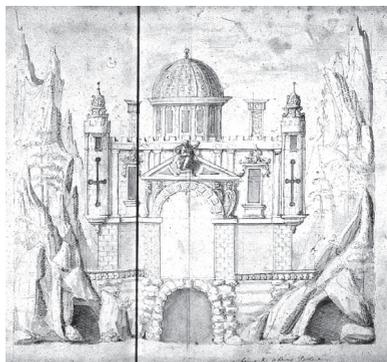
ヘンリー王子が 16 歳のとき、皇太子として仮面劇の作成をベン・ジョンソンに依頼した。『妖精の王子オベロン』というタイトルのこの仮面劇は、敵対するはずのアンティマスクの登場人物のサテュロスたちも、オベロン王子を慕ってその家来となる、そしてオベロン王子はアーサー王のような素晴らしい王になるだろうという祝賀と上昇志向に満ちたものであった。

1611 年 1 月 1 日、この仮面劇は上演された。作者はベン・ジョンソン、舞台装置と衣装はイニゴウ・ジョーン



2 『妖精の王子オベロン』岩場

ズ、音楽はアルフォンソ・フェラボスコ (Alfonso Ferrabosco II) であった。舞台装置は岩だらけの荒野→宮殿正面→宮殿内部へと展開しゆく。登場人物も初めはサチュロス、次に森の精 (妖精)、最後にオベロン (妖精の王子) と騎士たち (妖精の騎士) でありその設定にも、秩序が十分でない状態 (岩場) →秩序への期待 (宮殿正面) →秩序ある理想の形 (宮殿内部) という上昇志向が見られる。今までは、仮面劇



3 『妖精の王子オベロン』宮殿の正面

本体が始まりマスカーが登場すると、無秩序の世界の人物、サチュロスなどは、追い払われるか、逃げてゆくかして、消えてしまうことが多かったが、この仮面劇では彼らも高められて仮面劇本体に融合してゆくという新しい形をとっている。この時観客席にいたウィリアム・トランプル (William Trumbull) の記録の中から抜粋したものを以下に紹介する。

王が王女やスペインおよびヴェニスの大使を従えてお出ましになると、フラジオレット (フルートの仲間の縦笛) が奏される。カーテンが引かれると岩場が現れる。岩と岩の間からは月が上っているのが見える。そこでサチュロスたちのおかしなダンスがありとても楽しかった。岩が開くと大きな玉座があり、数えきれないほどたくさんの色の光が常に動いておりとても素敵だった。中央に王子が立っており、宮廷の中でもダンスの達人と言われている貴族たちがおそばに控えていた。この後2人の少年が歌い、次に10人の小さなお小姓たちがダンスをした。その後、王子とそばにいた貴族のマスカーたちは大変じょうずなダンスを披露した。王子は王妃アンをダンスに誘い、サザンプトン伯爵 (Earl of Southampton) は王女エリザベスを、他の貴族は別の女性を誘ってダンスをした。パヴァーヌに似た踊りやコランタ、ギャラルダを踊ったが、いずれも見事であった。王子は王妃を3回ダンスに誘った。こうしてダンスをしているうちに夜中近くになったので、国王は少しお疲れになり、そろそろお開きにするように伝えさせた。マスカーたちは退場のダンスを踊り、音楽や歌とともに玉座に進んでお辞儀をして下がった。このうち国王夫妻はしりぞき、大使たちも帰られた。⁵

舞台装置はめくらめくほどの素晴らしさであり、作品の内容も歌もダンスもすべて観客は大いに楽しんだ。皇太子の仮面劇として大成功であったようだ。しかし、この仮面劇には莫大な金額が使われたため、次の年に行われた仮面劇では前年度の十分の一ほどの予算しか使えなかった。

ヘンリー王子は自己の理想を広く臣下に示すための手段として仮面劇を用いた。彼は当時最先端の知識であった遠近法も学んでいたし、この仮面劇の音楽を担当したフェラボスコは王子の音楽の教師でもあった。その王子が1年後に18歳で没したことはイギリス中を悲しみのどん底に陥れた。王子であった彼の葬儀は君主の葬儀に匹敵する規模で行われた。実に多数の国民が彼の棺を見送った。

まだ悲しみがイギリス中を覆っているとき、1614年にエリザベス王女がプファルツ選帝侯と結婚した。この折の肖像画には黒い喪章を腕に巻き、ヘンリー王子の絵の入った黒いブローチをつけていた王女が描かれている。この結婚もジェームズ王がまとめた政略結婚である。その後プファルツ選帝侯は戦いに敗れてその地位を失った。プロテスタント諸国とよい関係を結ぼうとしたジェームズの意図はくじかれたが、エリザベスの孫がイギリスの、後のハノーヴァー王家を起こすことになった。



4 ローマ皇帝風の衣装、オペロン

5 『快樂と美德の和解』 (Pleasure Reconciled to Virtue, 1618)

ヘンリー王子亡き後、チャールズ皇太子が初めてメイン・マスカーとして登場する宮廷仮面劇が1618年1月6日に催された。この時期は国の財政がほぼ破産状態にあり、その状況下で以前のように莫大な金額を仮面劇に費やすべきではないという機運が高まっていた。従来は必要経費とみなされてきた仮面劇の費用も過大な分は制限するという改革案を、大蔵卿がこの数日前に制定したばかりであった。『快樂と美德の和解』にかかる費用を国王が借り入れるという文書も残っており、国庫がいかに厳しい状況にあったか、ま

た借金をしてまでも仮面劇を行っていたという状況がわかる。

ベン・ジョンソンがせりふ、歌、構成をてがけ、鬼才イニゴー・ジョーンズが衣装と舞台装置を担当したにもかかわらず、結果的には評判はよくなかった。1604年以來、見事な舞台装置や衣装にあって驚かされ続けてきた観客が、これほどお粗末な装置は見たことがない (The poorer never seen.) と述べている。イニゴー・ジョーンズの舞台装置は、機械仕掛けで次々に新たな背景へと切り替わることで、観客に驚きと喜びを与えてきたが、今回は最初から最後までただ一つの舞台装置で済まされていた。それも観客をがっかりさせた大きな理由の一つである。浪費を戒める議会の圧力もあり、また、借金をして調達した予算は十分に取れなかった。節約をせざるを得ない状況の中で作られた舞台装置も、ストーリーも、チャールズが皇太子として初めてメイン・マスカーとなる仮面劇としては大いに観客の期待を裏切るものであったようだ。

「イニゴー・ジョーンズはせっかく築いた評判をすっかり台無しにしてしまった」という評もあった。さらにベン・ジョンソンの作ったアンティマスクとマスク本体の部分についても観客は気に入らなかったようであった。当時は、立派な仮面劇作者、詩人、学者、劇作家として重きをなしていたジョンソンに対して「宮廷仮面劇作者などやめて、養父のもとでやっていた煉瓦職人に戻ったほうがいいのではないか」という侮蔑的な評価をするものさえあった。彼の父親は牧師であったがジョンソンが生まれる前に亡くなった。その後、彼の母親は豊かな煉瓦職人の親方と再婚したため、学問好きなジョンソンは短期間ではあるが、気の進まない煉瓦工の仕事をしたことがあったからである。

この仮面劇にはヘラクレス (Hercules) が登場する。この仮面劇の中ではヘラクレスが「美德」(Virtue) へと進む道と「悪徳」(Vice) へ進む道との岐路に立って、どちらの道を取るべきか迷う話、ヘスベリデスの園の金のリングを探しに行く話、怪物のアンタイオス (Antaios) やピグミー (Pygmy) と戦う話、アトラス (Atlas) と出会う話が使われている。特に訓練と労力が必要な「美德」と、快楽が期待される「悪徳」への道の岐路で若いヘラクレスがどちらを選択するべきか悩む話がこの仮面劇のテーマと関わっている。ここでは「悪徳」が「快楽」(Pleasure) と置き換えられている。そしてどちらかを選ぶのではなく、「快楽」も度を過ぎさない、ほどほどのもの

であれば構わないという結論となっている。

この仮面劇では「あれか、これか」という選択ではなく、「あれもこれも」という、両方とも手にいれるという結論が導かれている。すなわち、「快樂」をほどほどに楽しむことは「美德」と両立するという結論である。「美德」の女神と真っ向から対立すると思われる「快樂」の女神はジェイムズ王のもとで和解する。王のもとで「快樂」は仮面劇のような優れた、素晴らしい楽しみを時折与える。チャールズをはじめとするマスカーはアトラス（ジェイムズ王を象徴的に表す）の学問と美德の中ではぐくまれた。チャールズは仮面劇の行われている地上にしばしのあいだ降り立ち楽しむが、その後、山に帰り山上有徳の日々を送るという筋立てである。

冒頭のアンティマスクには、飲食の快樂にふけるコマス（Comus）が登場する。でっぷりした腹と酔いつぶれた様子、またヘラクレスのお酌係も酔って一人で歩くこともままならず、2人の人物に両脇を支えられてやっと立っている。いずれも快樂にふけりすぎるラブレー的な人物である。これは極端な形の「快樂」であろう。仮面劇の冒頭、アンティマスクが、酒に酔いしれた者たちの歌やスピーチで始まるのは、若い皇太子のデヴェュー作としては不似合いであると感じられたかもしれない。

さらに、この日は王も王妃も体調がよくなかった。仮面劇が大好きなアン王妃もおおましにならないほど体調が悪かった。ジェイムズ王も同じく体調が悪い日が続いていたのだが、何とか我慢をして出席していた。ヴェニス大使やスペイン大使も列席していたためでもあったろう。気分が悪かったうえに仮面劇もジェイムズ王の気に入らなかったのであろうか。マスカーたちがパヴァーヌ、コラント、カナリー、スペイン舞踊などを踊り、100回も美しいターンを見せていたにもかかわらず王は「なぜもっと踊らないのだ。何のために余をここに呼んだのだ。みんな、悪魔に食われてしまえ。踊れーっ」とどなった。すると寵臣のバッキンガム公爵がすぐにケイパーという足を交差するジャンプを何回も見せてエレガントに踊り、他の者たちも続いて次々踊ったのでやっと王の機嫌が治ったと当時の観客であったヴェニスの大使館付き司祭、オラツィオ・ブジーノ（Oracio Busino）が記している。⁶ 彼は、イギリス人の観客には受けが悪かったアンティマスクも楽しかったと書いている。⁷ 新しい演出などイギリス人には評判の悪かったマスクのいくつかについて、イタリア人やスペイン人の観客は「面白かった」と述べているもの

がいくつかある。国民感情のほかに、文化のレベルや感性の違いも、受取り方に影響を与えているようだ。

一般的に仮面劇は一度だけ演じられるものであるが、この仮面劇は2回演じられることになっていたので、特に評判のよくなかったアンティマスクの部分を陽気なウェールズ人のダンサーに変えることによって「前のものよりずいぶんよくなった」という評価を得ることができた。

ジェイムズ王は「最も賢くもっとも愚かな王」とも呼ばれる通り、学問には秀でていたが、他の点については、その言動には疑問符がつけられることが多かった。政治について大事な会議があるときに大好きな狩りに出かけて会議を欠席したり、狩りに行った先では、馬で耕作地を踏み荒らして農家の人に迷惑をかけたかといったことがあった。チャールズ王子も王に負けないほどわがままであったようで、彼が王として君臨した12年間を「12年間に及ぶ専制政治」と評する人もあった。今は亡きヘンリー王子への深い哀惜の念は消えやらず、さらにやや見劣りのするチャールズ王子のための仮面劇には、製作者たちは、いま一つ力が入らなかったのではないかとも思える。ヘンリー王子の仮面劇では、ヘンリーは、王の中の王ともいべきアーサー王と比べられるセリフがあったが、この仮面劇においてチャールズのイメージはヘラクレスと重ねられている。そのチャールズ皇太子に対しては、やがて王となるものとしてどのように振る舞うべきかを教えるというスタイルとなっている。仮面劇という楽しい体験の中に学びの要素が含まれるというベン・ジョンソンの特質がここにも見られる。

注

- 1 Glynne Wickham, *Early English Stages 1300-1660*, (Routledge and Kegan Paul and Columbia Univ. Press, 1981), pp.21-22
- 2 *The Yale Ben Jonson: Ben Jonson: Complete Masques*, ed. by Stephen Orgel, (Yale Univ. Press, 1969), p.2
- 3 James Shapiro, *Shakespeare, The King's Man* (DVD) (Athena, 2012)
- 4 James Shapiro, op.cit.
- 5 Papers of William Trumbull, H.M.C. Downshire Manuscripts, III, pp.1-2, quoted by Herford and Simpson, *Ben Jonson* (Oxford, 1925-52), X, pp. 518-25 から抜粋

- 6 Stephen Orgel and Roy Strong, *Inigo Jones* (California Univ. Press, 1973), vol. I, pp.281-4
- 7 Stephen Orgel and Roy Strong, op.cit. pp. 281-4